

諸分野における Metonymy (換喩) と Metaphor (隠喩) の概念

Conceptions of Metaphor and Metonymy in the multiple fields

新城直樹ⁱ・金井勇人ⁱⁱ

ARASHIRO Naoki and KANAI Hayato

(要旨)

Metonymy と Metaphor という概念は、修辞学・レトリック・文芸批評や、語用論 (関連性理論)・認知言語学などの分野で広く用いられている。しかしながら、各分野において統一的な概念として捉えられている、とは必ずしも言えないと考えられる。本稿では、これらが分野ごとにどのように用いられているかを概観することによって、あらためて Metonymy と Metaphor という概念についての理解を掘り下げる契機としたい。

キーワード : Metonymy、Metaphor、修辞学、記号論、語用論 (関連性理論)、認知言語学

1. 本稿の目的

Metonymy と Metaphor という概念については、各分野間において大まかなコンセンサスが得られていると思われるが、厳密に言えば、この概念が一義的に使用されているかどうかということ、実は、分野横断的に統一されているわけではないという感を否めない。本稿では、各分野における Metonymy と Metaphor という概念の異同を概観し、そして再考することを目的とする。

本稿は、大きく2つの章から構成される。まず第2章では、Metonymy と Metaphor を峻別し、対立させる捉え方を検討する。第2章は、以下の各節から構成される。

2-1 : 明治期の修辞学における Metonymy と Metaphor

2-2 : 現代のレトリック論における Metonymy と Metaphor

2-3 : 記号論における Metonymy と Metaphor

次に第3章では、“関連性”や“認知”といった上位概念を構築することによって、Metonymy と Metaphor の対立を止揚する捉え方を検討する。第3章は、以下の各節から構成される。

3-1 : 関連性理論における Metonymy と Metaphor

3-2 : 認知言語学における Metonymy と Metaphor

ただし、Metonymy と Metaphor という概念を分野横断的に定義することが本稿の目的ではない。本稿執筆の動機は、各分野における Metonymy と Metaphor という概念の異同を整理しておくことは、どのような分野の研究者にとっても有益である、と考えたことにある。

2. Metonymy と Metaphor を峻別し、積極的に対立させる捉え方

ⁱ 一橋大学 留学生センター 非常勤講師

ⁱⁱ 埼玉大学 国際交流センター 助教

2-1 明治期の修辞学における Metonymy と Metaphor

明治時代に入って Metonymy と Metaphor という語が日本に紹介されたが、これらの訳語として「換喩」と「隱喩」という語が固定してきたのは島村瀧太郎（1902）からであるとされる。島村（1902）では「譬喩法」として「直喩法、隱喩法、提喩法、換喩法、諷喩法、引喩法、聲喩法、字喩法、詞喩法、類喩法」の10種類を挙げており、換喩と隱喩はそのうちの一つとして以下のように解説している。

- (1) 換喩法とは種類の相異相關を主とせる比喩なり。隨伴物を以て本名に換ふるものなり。之れを大別して四類とすべし。即ち第一種、記號と實物との關係に基けるもの。第二種、持主と持物との關係に基けるもの。第三種、原因と結果との關係に基けるもの。第四種、原料と作物との關係に基けるもの之れなり。（島村 1902:317）
- (2) 隱喩法とは直喩に反して比喩の比喩たる處を埋没したるものなり。「如し」「似たり」等の説明詞を藉らざるは勿論、喩義と本義の區別をさへ全く隠して、二事件を打ち混じ一に言ひ做すものなり。例へば「袖に露おく」「心に劔をふくんだる女」などいへる類正當には「露のおけるが如く涙袖を濡らす」「心に劔の如く人を害するの念をふくんだる女」などあるべきを斯くては尋常の直喩たるに終りて文勢弛むの恐あり、此をもて之れを引き約めて涙と露と又は劔と害心とを一に言ひ做したるなり。されば一方よりいふときは隱喩法はまた直喩法の緊縮せられ省略せられたるものといふべし緊縮省略は隱喩法の一特色なり。涙に關する思想に、かけ離れたる露といふ思想を加へたるは想念の増加に外なけれど隱喩法はさらに之れを緊禁して用ふるなり。（島村 1902:307）

「換喩」や「隱喩」という日本語は、明治期に西洋からの修辞学の翻訳を通して作られたものであり、その翻訳語がどのような概念を表示するかということの定着には少なからず時間を要した。特に、それぞれの比喩法が相互にどのような違いがあるのかという問題については、直喩法と隱喩法では「如し」、「似たり」の有無という明確な基準によって説明されたが、それ以外の比喩法相互の違いは明確な説明がなされてきたとは言えない。

修辞学の分野では「換喩」と「隱喩」よりも、「換喩」と「提喩 (Synecdoche)」はどう区別されるべきかということが議論されてきた。「換喩」と「提喩」は区別されるべきという立場と、両者に区別は設ける必然性はないという立場があるわけであるが、五十嵐力は「換喩」と「提喩」の間に区別を設けず、かつ、「換喩」という訳語は用いずに「舉隅法」と呼んで以下のように解説している。

- (3) 舉隅法は一隅を擧げて四隅を知らしめ、一斑を示して全豹を察せしむる修飾、平易にいへば一部分を提示して全體を察せしめ、或は主體に關係ある事物を掲げて主體を察せしむる詞姿である。例へば、天保老人を「チョン鬚がかうかうした。」というて、チョン鬚の持主たる老爺全體を察せしめ、「雪白のカフスがさし招いた。」というて白いカフスを着けた紳士を表し、(...中略...) 近松、馬琴の作を読むことを「近松、馬琴を読む。」といひ、酒客を「左き」といひ、質屋を「土倉」といひ、秀吉を太閤、光圀を黃門といふ類ひ、皆是れ部分によつて全體をあらはし、關係ある事物によつて主體をあらはすあやなし方である。事物の名稱、殊に敬語や綽名の如きもので、舉隅法によらぬは殆んど無い。（五十嵐 1909:347）

島村（1902）と五十嵐（1909）の説明を読んでもみると、両者の間の違いは島村が「記號と實物」、「持主と持物」、「原因と結果」、「原料と作物」というように具体的な事例に基づいた分類となっているのに対し、五

十嵐は「一部分と全體」、「主體に關係ある事物を掲げて主體を察せしむる」とあるようにより抽象的な立場での説明となっている。五十嵐では換喩、提喩を「部分と全体の關係」という一般的な關係としてまとめて取り上げていると言える。「チョン髷がかうかうした」や「近松、馬琴を読む」という表現があることは事実であるし、これらの表現が「チョン髷の老人がかうかうした」、「近松の本、馬琴の本を読む」とは違う表現効果を持っていることもまた事実である。五十嵐の分類では「擧隅法」は比喩とはされておらず、「詞姿 (Figure of speech)」の一つであるとされる。五十嵐が「譬喩」として扱っているのは「直喩法」、「隱喩法」、「諷喩法」、「活喩法」、「結晶法」に限られている。五十嵐にとっての「譬喩」は文字通り「譬える」という行為であり、譬えるものと譬えられるものはそれぞれ別のカテゴリーであり、かつ、それらの間に類似性があるという前提がある。五十嵐にとって、「チョン髷」と「チョン髷の老人」の關係は別カテゴリーであることに焦点があるのではなく、ましてや「チョン髷」で「チョン髷の老人」を譬えているということはないと判断した結果が「擧隅法」という分類であり、「譬える」のではなく、あくまで「察せしむる」という表現を用いていることからその考えがうかがえる。

このように、五十嵐においては「隱喩」と「換喩」が並んで対立概念としてあるという以前に、そもそも「換喩」は比喩法ではないという扱いであった。

修辞学の系譜では古来より言語表現を分類し、体系化することが行われてきており、分類・体系化の常として経済性（より少ない説明原理でより多くの事象を説明できること）が目指されることから、様々な立場から論が展開されてきた。修辞学の分類において、「換喩」と「隱喩」の區別はそこに「喩え」があるか否か、また、そもそも「喩え」の定義とは何かということが重要であると考えられる。喩えるものと喩えられるもの間に類似性がある場合に「喩え」と言えるのか、または類似性はなくとも二つの異なるもの同士の間には何らかの關係性があればよしとするのか、どちらの立場に立つかによって「隱喩」と「換喩」の區別自体の必要性が変わってくるであろう。これは修辞技法、特に比喩法の分類がそもそも何を目指して行われるかによるものであると考えられる。

2-2 現代のレトリック論における Metonymy と Metaphor

明治期以降修辞学の分野では「換喩」や「隱喩」を明確に分けるという立場において言語表現の分類が中心に行われてきていたが、佐藤（1978）では「換喩」と「隱喩」の二つに「提喩」を関連させて章立てを行い、レトリックは表面的な装飾にとどまらず、新しい視点を設置する根源的な言語活動であるという立場を主張した。佐藤（1978）で特徴的であったのは、換喩と提喩を明確に分け、かつその違いについて明晰に論じたことであろう。換喩は「現実的な隣接性」、提喩は「意味的な大小關係」として換喩と提喩を区分しており、これは五十嵐（1909）で換喩と提喩が区別されていなかったことと大きく違っている。

「換喩」という訳語を用いてはいるが、「換喩」の「喩」ということから連想される「喩え」という側面は強調されず、たとえば「赤シャツ」という例では、「喩え」が行われているわけではなく、当事者から見たらそれはまさに「赤シャツを着た何者かではなく、赤シャツそのものである」ということをそのまま表現している、という論旨である。佐藤が「換喩」と「提喩」の區別にこだわったことも、このような人間の視点、言語による世界の切り取り方を分類した結果であると考えられる。

「換喩」と「隱喩」の区分については、以下のように「提喩」と「隱喩」が近い關係にあるとして、「換喩」⇔「提喩・隱喩」という対立軸を示唆している。

- (4) 本質的に、提喩と隱喩は同系のことばのあやである。そしていずれも、語句の意味的な類似性にもとづく比喩であるという点が共通で、現実的な共存性にもとづく比喩である換喩とは対立するものだ

と言わなければならない。いつも提喩を換喩に近いものとして説明してきた古典レトリックの考えかたを、私たちは修正しなければならぬであろう。(佐藤 1978:162)

「隠喩」と「提喩」が同系のことばのあやであるということに関しては、Groupe μ (1981) における「隠喩は二重の提喩である」とする論に基づいて、佐藤はさらに Groupe μ の説明の不備を指摘した上で独自の論を組み立てている。ここで佐藤の主張の中で重要であるのは、数ある比喩法の中で「換喩」と「提喩」の間にまず対立軸があり、さらに「提喩」と「隠喩」が近い関係にあることから、「換喩」と「隠喩」の間にも対立軸があるという分類である。

修辞学においては、言語表現の分類と体系化が目指されるが、それはある言語表現の型に命名する作業といえる。Metonymy は Metaphor と比べてその定義自体が非常に曖昧なものであったが、その意味で修辞学における Metonymy の考察は「持ち主と持ち物」や「原因と結果」、「容器と中身」など古くから Metonymy であるとされてきたものをさらに精緻化する試みの積み重ねであったと言える。そこからさらに進めて Metonymy と Metaphor に対立軸を見いだすことは大きな前進であったといえる。これは修辞学、そして現代のレトリック論における比喩研究が、言語表現の外面的な分類から人間の認識一般の探求へと変わってきたことの一つの表れであると考えられる。

さまざまな分野において「換喩」と「隠喩」という語が理論的概念として用いられてきているが、単独で「隠喩」と「換喩」という概念を用いるのではなく、両者が対立するものとして重要な位置を占めているのではないかと考えられるのである。

2-3 記号論における Metonymy と Metaphor

「言語の二つの側面と失語症」(Jacobson:1956) は言語学以外の幅広い分野にも影響を与えてきた。失語症患者には大きく二つのタイプがあり、一つは語の言い換えができないタイプ、あと一つは語をつなげて文を作ることができないタイプとされている。語の言い換えは類似性に基づくことから Metaphor に関係があり、語をつなげることは近接性に基づくことから Metonymy に関係があるとして、「類似性 (Metaphor)」と「近接性 (Metonymy)」が言語の主軸にあることを示唆した。このように、類似性と近接性を主軸に置く態度は、佐藤 (1978) において、隠喩は類似性に基づき、換喩は現実的な共存性 (すなわち近接性) に基づくとして両者を峻別する態度に通底していると言えよう。

Barthes (1971) では、Jacobson の「類似性 (Metaphor)」と「近接性 (Metonymy)」の概念が言語学にとどまらず、広く記号一般についてのことであるとして以下のように述べている。

- (5) ソスジュールは、統合的なものと連合的なもの (われわれのこれからの用語では体系的なもの) とが、精神活動の二つの形態に対応するのではないかと予測していたが、これはすでに言語学の領域から足を踏み出していたことになる。ヤコブソンは、今や有名になった論文で、この拡大解釈を引きつぎ、メタフォール (体系の次元) とメトニミー (統合の次元) とを対立させて言語以外のコトバに適用した。これによれば、メタフォール型の「^{ディスクール}話」とメトニミー型の「^{ディスクール}話」があることになる。(中略) メタフォール性の強い「^{ディスクール}話」とメトニミー性の強い「^{ディスクール}話」とがあるというヤコブソンが開いた視界は、言語学から記号学への道の突破口になる。(Barthes 1971:159-161)

しかしながら、Barthes は「ヤコブソンに従って、分析者 (目下の問題としては記号学者) はメトニミーよりもメタフォールを論ずることのほうに多くの武器を持っている (p.160)」、「メタフォールに関しては豊富

な文献があるが、メトニミーに関しては無きに等しい (p.160)」として文学理論を論じる際も主に **Metaphor** について論じ、**Metonymy** についてはほとんど触れていない。

日本においても **Metaphor** に比べて **Metonymy** の概念は文芸批評・文学理論で取り上げられることは決して多いとはいえないが、例えば美濃部 (2004) では Jacobson の **Metonymy** と **Metaphor** に関する論を紹介した後、に次のように続けている。

(6) 現実との関係において<閉じられた文学>は作品世界がテキスト内部において完結性を持ち現実とは意味的相似性による呼応関係を持つ文学である。その意味で<隠喩的文学>と呼び得るだろう。いっぽう現実との関係において<開かれた文学>は作品世界がテキスト内部のみならず現実とも因果関係を持ち、現実のうちに陳述的 **perspective** な首尾関係を持つ出来事を見だし得る文学である。その意味で<換喩的文学>と呼び得るだろう。

たとえば『源氏物語』は平安時代の宮廷生活と人物をモデルに見だし得るが、現実そのものを直接の話題にしてはいない。その意味で<閉じられた文学>つまり<隠喩的文学>と呼ぶことができる。それに対して『平家物語』は現実の出来事を直接の話題にする作品であり、その世界は源平時代の現実さらには『平家物語』が作成された時期またテキストが改編されてゆく時期における現実と陳述的 **perspective** な首尾ないし因果関係を持った作品である。(美濃部 2004:110-111)

この美濃部 (2004) での「換喩」という語の用いられ方は、ある特定の言語表現を指すために用いられてはいない。Jacobson が示唆したように、言語の基本的な機能を説明するための概念として「隠喩」と「換喩」が用いられたことと同様に、美濃部は文学を大きく二つに分類する指標として「隠喩的」と「換喩的」という語を用いている。ここで、比喩法の名称を用いて何かを喩えているという二重構造が見られる。そもそも比喩法の名称 (直喩法や隠喩法、換喩法、提喩法等) は、言語表現に言及するメタ言語として修辞学の中で作られたものである。それが言語表現以外の構造 (テキストの構造や、文脈との関係性等) にまで拡張されていったことと相関してその使い方自体が「比喩法の名称を用いて比喩を行っている」行為となっていることは注目すべき流れである。ここに、修辞学概念であった **Metonymy** が記号一般を対象とするための戦略的概念として採用されていく流れを読み取ることができる。

さまざまな分野で **Metonymy** や **Metaphor** という概念が用いられるとき、それをを用いることによって、言語表現そのものについて語っているのか、比喩法を比喩として言語表現以外の構造 (テキストの構造や、文脈との関係性等) を語ろうとしているのか、という区別がつかない場合も少なからずあると思われる。このことは、言語表現と認識は区別されるべきかという二分論にもつながることも含め、非常に重要なテーマとなりうると思われる。

3. 上位概念を構築することによって、**Metonymy** と **Metaphor** の対立を止揚する捉え方

3-1 関連性理論における **Metonymy** と **Metaphor**

本章で取り上げる「関連性理論」は、Sperber and Wilson (1986) などによって、Grice の提唱した語用論のうちの「関係の公理 (Maxim of Relation)」が発展したものであり、「関連性」という単一の原則で言語伝達を捉え直した理論である。以下では Carston (2004) に依拠しながら、「関連性理論」を概観してみたい。

Carston (2004) は、語用論的意味を *explicature* (明示的意味) と *implicature* (暗示的意味) に分類する。ⁱⁱⁱ ここで言う「明示的意味」とは、あくまで言語的な要求 (*linguistic mandate*) からのみ得られる、語用論的な意味を指す (後に詳述)。それに対して暗示的意味とは、言語的な要求以外から得られる、語用論的な意味を指す。^{iv} 例えば、

(7) A : 今晚、飲みに行こうよ。

B : 明日は出張で、準備で忙しいんだ。

(7)の対話は、何ら不自然ではない。しかし、あえて形式的な構造体としての「文」に注目してみると、実はこの対話は“呼応”していない。つまり、(7A)は「飲みに行こうよ」と誘ったのだから、(7B)は「そうだ、行こう」か、「いや、行かない」という、yes/noの2通りしか、回答は許されないはずである (表現の仕方にはバリエーションがあるだろう)。

ところが、(7B)の発話は“明日は出張で忙しい→だから今晚は飲みに行けない”という推論をいとも簡単に成立させるので、(7)の対話は何ら不自然ではないのである。しかしながら、このような推論は、言語的な要求 (*linguistic mandate*) から得られるのではない。「常識」や「文脈」等々の言語外のファクターによってこの推論は成立するのである。したがって、このような推論の結果として得られる意味は、Carston (2004) に従えば「暗示的意味」ということになる。

それでは言語的な要求 (*linguistic mandate*) からの推論のみから得られる「明示的意味」とは、どのようなものか。Carston (2004) は、以下の3つのタイプを挙げている (ただし(8)の *Disambiguation* と *Saturation* を別と解釈すれば、4つとなる)。

(8) *Disambiguation* and *Saturation*

例えば、「しりつ大学」という発話を聞いたとき、「私立大学」なのか「市立大学」なのか、どちらか1つに決めなければならない。このようにして (同音異義語などの) 曖昧性を除去していく作業が *Disambiguation* である。また、例えば「それは同じだ」という発話では、「それは【何と】同じなのか」という問題が、必ず提起される。すなわち【何と】の部分がスロットになっていて、このスロットに値を補充 (*Saturation*) する必要性が生じるわけである。

これらは、(7B)の発話の語用論的意味を推論する (させる) プロセスとは、まったく異なる。すなわち、「しりつ大学」「それは同じだ」という発話は、言語的な要求 (*linguistic mandate*) としてのみ語用論的推論を誘発するのである。したがって、「私立大学」か「市立大学」かの選択が行われた後の意味、また【何と】の部分が補充された後の意味 (例えば「それは私のものと同じだ」など) は、「明示的意味」である。

(9) *Free enrichment*

例えば、「私は夕食を食べた」という発話を考えてみたい。人は生まれてからずっと、毎日食事をしている。

ⁱⁱⁱ 語用論的意味を引き出す元となる「文」自体の形式的意味は、*explicature* に分類される。

^{iv} Grice は *linguistic mandate* という概念を採用していない。したがって Grice の語用論では *explicature* と *implicature* の境界が曖昧である (というより、そもそも問題としていない)。Grice 的な語用論と、関連性理論との大きな違いの1つは、この点にある。

したがって「私は夕食を食べた」という発話の解釈としては、「5年前に食べた」という解釈も、実は不可能ではない。しかしながら、「私は夕食を食べた」と（だけ）発話した場合、通常であれば「今晚、食べた」という意味を表すだろう。つまり「私は夕食を食べた」という発話には、(8)の「それは同じだ」とは違って、明確なスロットこそないが、確かに何かが表示されていない。その部分を“自由に装飾する（させる）”のが、(9)の **Free enrichment** である。この推論によって得られる語用論的意味も、「明示的意味」である。

(10) Ad hoc concept construction

例えば、「メアリーはブルドーザーだ」という発話は、ある文脈では「メアリー」という愛称を持つ「ブルドーザー」があるという解釈が可能である。しかし、別の文脈では「メアリーはブルドーザーのようにタフだ」「メアリーはブルドーザーのように押しが強い」等々という解釈が行われるだろう。どの解釈が選ばれるかは、文脈との関連性の強さによって決まってくる。ここで重要なのは、後者の解釈が選択されるとき、この「ブルドーザー」には **ad hoc** な意味が託されている、ということである。したがって、関連性理論における **Metonymy**、**Metaphor** の概念は、この **Ad hoc concept construction** であると考えられる。^v

まず **Metaphor** から見ていきたいが、「メアリーはブルドーザーだ」という表現は、「ブルドーザー」という語によって喚起される語用論的推論によって、「メアリーはブルドーザーのようにタフだ」と解釈されるわけである。つまり「ブルドーザー」には **Ad hoc concept construction** として“タフな人物”という **ad hoc** な意味が託されていると考えられる（両者は“類似性”によって“関連性”を持つ）。

次に **Metonymy** を見てみたい。例えば、いつもメアリーは赤いシャツを着ている、というコンセンサスがあるとき、「あの赤シャツはブルドーザーだぜ」という陰口を叩いたとしたら、どうであろうか。このとき、「赤シャツ」に **ad hoc** な意味＝“赤いシャツを着ている人物”が託されているのである。この **ad hoc** な意味は「赤シャツ」によって喚起される語用論的推論によって得られる（両者は“近接性”によって“関連性”を持つ）。つまり二重の **Ad hoc concept construction** を施されていることを理解して、初めて「あの“赤シャツ”を着ている人物”は“ブルドーザーのようにタフな人物”だぜ」という語用論的な意味が解読できる（これも言うまでもなく「明示的意味」である）。

以上の考察から分かるように、関連性理論における **Metonymy**、**Metaphor** は **Ad hoc concept construction** として捉えられる。すなわち、関連性理論においては、**Metonymy** も **Metaphor** も **Ad hoc concept construction** の1種に過ぎない。言い換えれば、**Ad hoc concept construction** という概念の下に、**Metonymy** と **Metaphor** との、対立が解消してしまうものと考えられる。

第2章においては、**Metonymy**（喚喩）と **Metaphor**（隠喩）とを峻別して対立させる佐藤（1978）等の捉え方を検討した。これは言語理論の一面においては真実であることは間違いない。しかしながら、他面から捉えるなら（すなわち“関連性”という観点から捉えるなら）、この両者を対立させて考える必然性は、特にないわけである。

どちらの捉え方が優れているかを判断することは、本稿の目的ではない。そうではなく、観点が異なる2つの捉え方の異同を指摘できれば、本稿の目的は果たせると言ってよい。

3-2 認知言語学における **Metonymy** と **Metaphor**

認知言語学では、従来の文法論（いわゆる形式的な文法）という枠組みに依拠することを否定する立場を

^v 「関連性理論の専門用語には、メタファー（**metaphor**）という用語ではなく、概念のルース化（**loosening**）の問題として扱われる」（東森・吉村 2003:146）。

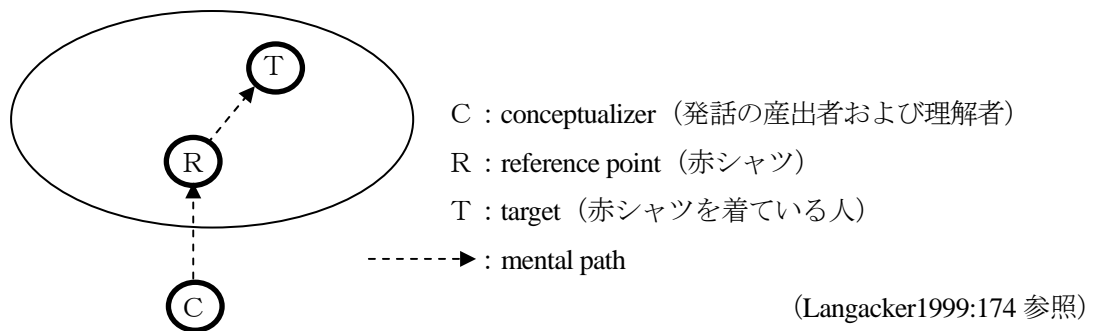
とり、言語の産出および理解を人間の認知 (cognition) と結びつけて考えると、最大の特徴がある。すなわち、(生成文法に代表されるような) 言語の自律性という概念を肯定せず、言語の産出および理解は、人間の認知能力にかかわる経験的根拠に依存して行われる、と考える。それでは認知言語学では、Metonymy および Metaphor は、どのように捉えられるのだろうか。

Metonymy においては、reference point と target という概念が使用される。これらの概念について Langacker (2008) は次のように述べている。

(11) ... We have the ability to invoke the conception of one entity in order to establish “mental contact” with another. The entity first invoked is called a **reference point**, and one accessed via a reference point is referred to as a **target**. (Langacker2008:83)

ここで“赤シャツを着ている人”を「赤シャツ」と呼ぶ場合を考えたい。例えば「赤シャツが来た」という発話においては、「赤シャツ」は「赤シャツ」自体を指すのではなく、“赤シャツを着ている人”を指すのでなければおかしい。このとき、発話の産出者および理解者は、「赤シャツ」を reference point、“赤シャツを着ている人”を target として“認知”しているわけである。このことを図示すると、次のようになる。^{vi}

図 1



このように、target を指すにあたって、直接的に target を言語化せず、reference point を言語化して、そこから target への mental path を通じて、2次的に target を指す、というのが、認知言語学における Metonymy の概念である。なぜこのような煩雑 (と思われる) 指し方をするのだろうか。それは、このような指示方略を選択するとき、一般的には、target よりも reference point の方が、相対的に際立ちが高いからに他ならない。

しかし実は、図 1 は Metaphor にも有効な図式である。それでは、Metonymy と Metaphor では、どのような相違が見られるのだろうか。

まず、Metonymy において reference point から target への mental path を保証しているのは、いわゆる“近接性”と呼ばれるリンクである。この“近接性”について、山梨 (2000) は次のように述べている。

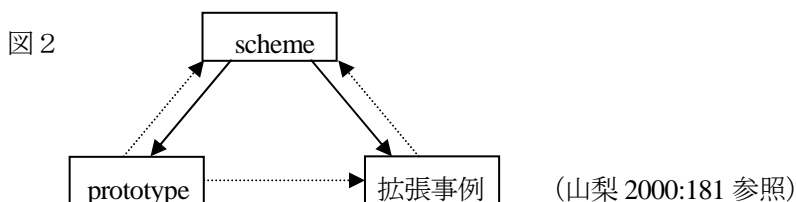
(12) メトニミー表現は、<容器—中身>、<主体—付属物>、<全体—部分>、<作者—作品>といった、近接性のリンクによって関連づけられる存在の一方を言語化することにより、もう一方の存在を理解させる言語的な手段の一つ…。(山梨 2000:111)

したがって「赤いシャツ」であれば、<主体—付属物>といった“近接性”のリンクがあって、そして主体

^{vi} 認知言語学の分析において、“図示する”ことが多く行われるのは、発話の産出および理解が“人間の持つ認知能力に関わる経験的根拠に依存している”という基本的な考え方に起因する、とすることができる。

よりも付属物の方が、相対的に際立ちが高い場合において、付属物である「赤シャツ」によって主体である「赤シャツを着ている人」を指すことができる、ということである。^{vii}

一方、Metaphor において reference point から target への mental path を保証するのは、“近接性”ではなく、いわゆるイメージの“類似性”である。ここでは scheme、prototype、拡張事例といった概念が利用される。



例えば「メアリーはブルドーザーだ」における「ブルドーザー」を例に考えたい。この場合、scheme となるのは、“タフなもの・押しの強いもの”である。その scheme の prototype が「ブルドーザー」である。

ただし scheme (および prototype) からは拡張事例が生まれ得る。それが言わば“タフな人・押しの強い人であるメアリー”ということになる。したがって、「ブルドーザー」と「メアリー」との間には、scheme を介して、“類似性”に基づいたリンクが築かれているわけである。^{viii}

以上を整理すると、Metonymy の場合には“近接性”に基づき、reference point と target との mental path が保証される。これに対して Metaphor の場合には“類似性”に基づき、reference point と target の mental path が保証されるわけである。

とは言っても、佐藤 (1978) などの主張とは対照的に、“認知”という上位概念を構築することにより、Metonymy と Metaphor の対立を止揚することは、前節で見た“関連性”によって両者の対立を止揚することと、同じ発想であると言えるだろう。

4. まとめ

本稿では、Metonymy および Metaphor という概念についての各分野における異同を検討した。本稿の冒頭においても述べたが、Metonymy および Metaphor という概念を一義的に定義するということは、本稿の目的ではない。そうではなく、各分野における Metonymy および Metaphor という概念の異同を整理しておくこと自体が、どの分野における分析者にとっても有益であるという確信が、本稿の執筆の動機となった。

本稿では、明治期の修辞学、現代のレトリック論、記号論、語用論 (関連性理論)、認知言語学といった各分野での Metonymy と Metaphor という概念の異同について考察してきた。

^{vii} その他の近接性のリンクには、次のようなものがある。＜容器－中身＞の例としては「鍋が煮えている」(鍋の中身が煮えている)、＜全体－部分＞の例としては「電話を取る」(電話の受話器を取る)、＜作者－作品＞の例としては「夏目漱石を読む」(夏目漱石の書いた本を読む)などが挙げられる。

^{viii} ただし、“類似性”を認める基準については曖昧であり、問題が残されていないわけではない。この点について Lakoff (2000) は、次のように述べている。

(13) そのメカニズムは何か。その写像に対する制約は何か。何の問題もなく写像できたり、かなり意識的努力が必要であったり、写像がまったく不可能であったり、などするメンタル・イメージとはどのような内部構造を持つものであるか。(Lakoff2000:48, 杉本孝司訳)

例えば、本稿の例で言えば、「メアリー」を「ブルドーザー」という Metaphor で呼ぶことは、何も問題がない。しかし「メアリーはテレビだ」と言うと、その理解には意識的努力が必要と思われる (例えばテレビのように良く喋るなど)。さらに「メアリーは机だ」と言ったならば、通常の解釈では「メアリー」と「机」を結びつけることは不可能である。これらの Metaphor 成立の可否 (難易) は、いったいどのような制約によるのだろうか。

まず、1つの捉え方は、佐藤（1978）や Barthes（1971）などに見られるように、Metonymy と Metaphor を峻別し、さらに積極的に対立させるというものである。そして、もう1つの捉え方は、関連性理論や認知言語学に見られるように、“関連性”や“認知”といった上位概念を構築し、Metonymy と Metaphor の対立を止揚させるというものである。

時間軸から見れば、前者の捉え方から後者の捉え方へと移っていくわけである。しかしながら本稿の立場としては、どちらの捉え方が優れているかということの問題にしない。また、それはそもそも言語観の相違によるものであるから、優劣をつけられるという類のものでもないだろう。しかしだからこそ Metonymy と Metaphor という概念の、各分野における使用のされ方の異同をあらためて確認しておくことは、大きな意義を持つと考えられるのである。

参考文献

- 五十嵐力 (1909)『新文章講話』博文館
- 佐藤信夫 (1978)『レトリック感覚：ことばは新しい視点をひらく』講談社
- 島村瀧太郎 (1902)『新美辞学』東京専門学校出版部
- 杉谷英紀 (1996)「横光利一『悲しみの代価』『愛巻』の表現特性—換喩から隠喩へ」『日本近代文学』1996年5月号(通号54), pp.43-55, 日本近代文学会
- 樋口恵子 (1995)『イソップのレトリック：メタファーからメトニミーへ』勁草書房
- 美濃部重克 (2004)「<開かれた文学><換喩的文学>としての『平家物語』—「額打論」を中心に」『国文論叢』No.34, pp.110-124, 神戸大学文学部国語国文学会
- 東森勲・吉村あき子 (2003)『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション』研究社
- 山梨正明 (2000)『認知言語学原理』くろしお出版
- Barthes, Roland (1971) (渡辺淳・沢村昂一訳)「記号学の原理」『零度のエクリチュール』pp.85-206, みすず書房, 原文初出 1953
- Carston, Robyn (2004) “Relevance Theory and the Saying/Implicating Distinction,” Laurence R. Horn and Gregory Ward (ed.) *The Handbook of Pragmatics*, pp.633-656, Blackwell Publishing.
- Grice, H. Paul (1989) *Studies in the way of Words*, Harvard University Press.
- Groupe μ (1981) (佐々木健一・樋口桂子訳)『一般修辞学』大修館書店, 原文初出 1970
- Jacobson, Roman (1973) (田村すゞ子訳)「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」川本茂雄監修『一般言語学』pp.21-44, みすず書房, 原文初出 1956
- Lakoff, George (2000) (杉本孝司訳)「不変性仮説—抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか?」坂原茂編『認知言語学的发展』pp.1-59, ひつじ書房
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol.1, Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter.
- Sperber, D. and Wilson, D. (1986) *Relevance: Communication and cognition*, Harvard University Press.